

宮島自然植物実験所における地域貢献～植物自然観察会～

技術センター 理学部等部門

研究実験技術班 向井 誠二

はじめに

宮島自然植物実験所は、「宮島のすぐれた自然の立地条件を生かして植物学に関する教育・研究を行う」ことが目的であるが、宮島全島の素晴らしい自然を後世に伝えていくための一般社会及び地域住民にも自然保全に関する教育・研究を行うことも重要である。

厳島と背景の弥山原始林は、平成8年に世界遺産に登録されもはや宮島は世界のひのき舞台に置かれ、宮島自然植物実験所も更なる重要な位置付けとなりつつ地域貢献のみならず世界規模で社会における関わりはより深くなった。

また、宮島自然植物実験所の役割は各方面からの窓口としての重要度が高く、独立法人化後の広島大学の組織の中でも宮島自然植物実験所がどのような活動をしているかをより具体的にアプローチすることにより、広く一般に知ってもらい宮島自然植物実験所をより身近に感じてもらいたい。

宮島自然植物実験所と地域貢献

宮島植物実験所は、宮島における自然植物園としての役割ももっており、生物多様性や遺伝資源の保護を実践し、それを学ぶことの出来る場として一般に公開されている。宮島自然植物実験所は大学と社会との直接の接点そのものであるという認識に立ち地域住民との交流を推進し、講演会や講習会をはじめ、ボランティア活動への協力、各種公共団体への講師・助言等も行っている。来園見学者には園内での説明案内などいつでも気軽に応じ、また各種教育機関からの要請による野外学習にも対応している。その他生涯教育等や地域住民及びマスコミ関係者などからの植物に関する疑問や情報についての問い合わせなどにも積極的に取り組むなど我々スタッフの大切な仕事として、地域に開かれた大学の窓口としての役割を果たしている。

地域との情報公開

宮島自然植物実験所は、どのように地域に密着して存在しているかホームページを通じてより一層具体的に知って頂き、ホームページには実験所の施設の案内や活動状況などを紹介する。また、地域との具体的つながりと役割など、特に宮島自然植物実験所は、宮島町との関わりが特に強くお互い協力関係をもち、宮島の自然環境と植物を主にホームページを通じて情報公開をしている。

具体的には、宮島の季節的植物の紹介・サクラの開花情報・もみじの紅葉情報・厳島の自然・島と暮らし(今と昔)・宮島の野鳥・鹿との関わり・宮島の行事などを紹介し宮島デジタル博物館構想に向けて宮島自然植物実験所は地域とより積極的に関わりを持っている。

植物観察会の紹介

宮島自然植物実験所は、教育・研究の場のみならず、植物観察会を毎月行うなど生涯教育活動にも力を入れてきている。植物観察会は、植物を通じて自然に親しみ自然保護と教養を高める目的で行われている。宮島自然植物実験所は、毎月1回自然植物観察会を実施し地域貢献のみならず広く一般か

らの参加希望者を案内している。また、広島大学の教職員や学生達も多々参加し知識を高めている。

植物観察会は、1977年以来宮島自然植物実験所が開催担当することになり、既にこの4月で305回になった。会員もメーリングリスト会員約100名、はがき案内260名の計360名に案内を出している。

植物観察会の歴史

最初の植物観察会（発足当時は、ヒコビア植物観察会と呼ばれた）は、1956（昭和31）年に広島大学理学部植物学教室分類学講座の堀川芳雄教授によって始められた「広島植物採集会」から出発している。この採集会は、ヒコビア会と広島地方の植物愛好家との話し合いによって誕生し、当初は新聞に案内も出て、貸し切りバスをつらねて参加者は100名を超すこともあったという。植物愛好家の3氏が幹事として世話役にあたり、毎月1回開催を原則としていた。

その後、堀川教授が退官された1966年頃にはほとんど開かれなくなったが、大学紛争に巻き込まれた1969年8月に大学院学生有志により再開されたが、その1回目はちょうど学生による理学部封鎖の日であった、学部学生、大学院学生および教官の間の交流を目的として再開したので、参加者は学内の教官と学生が多かったが、毎月1回、雨天決行ということで続けられ、場所選定などの幹事役を大学院生が交代で自分の好みに合わせて開けるようにしていた。

1977年から宮島自然植物実験所の共催ということで前所長 関太郎助教授が指導を引き受け1999年4月までされた。その後1999年5月以降、実験所副所長 豊原源太郎助教授が現在も指導にあっている。

参加者も学外からの参加者も数多くなってきた。1983年11月から会の名称を植物採集会から植物観察会に変更したが、自然保護を主張しながら、採集を目的とするような会の名称からくる誤解を避けたいとの思いがあった。また、野草ブームにのって野草を採掘するために会に参加する人に対する歯止めの意味もあったようである。

その後参加者は学外者の占める割合が増えて、学生の参加者が少なくなる傾向にあるが、生物学の流れが分子生物学関係に偏ってきたことに関係する現象かもしれない。しかし、一般の参加者は多く、少数ながら学生の参加も根強いものがある。

自然植物観察会の流れ

植物観察会は、毎月1回雨天決行で行われ、毎年12月に翌年一年間の予定を立案し会員全員に案内を送る。年間予定には、一般の方からの希望も積極的に取り入れ計画を立てる。

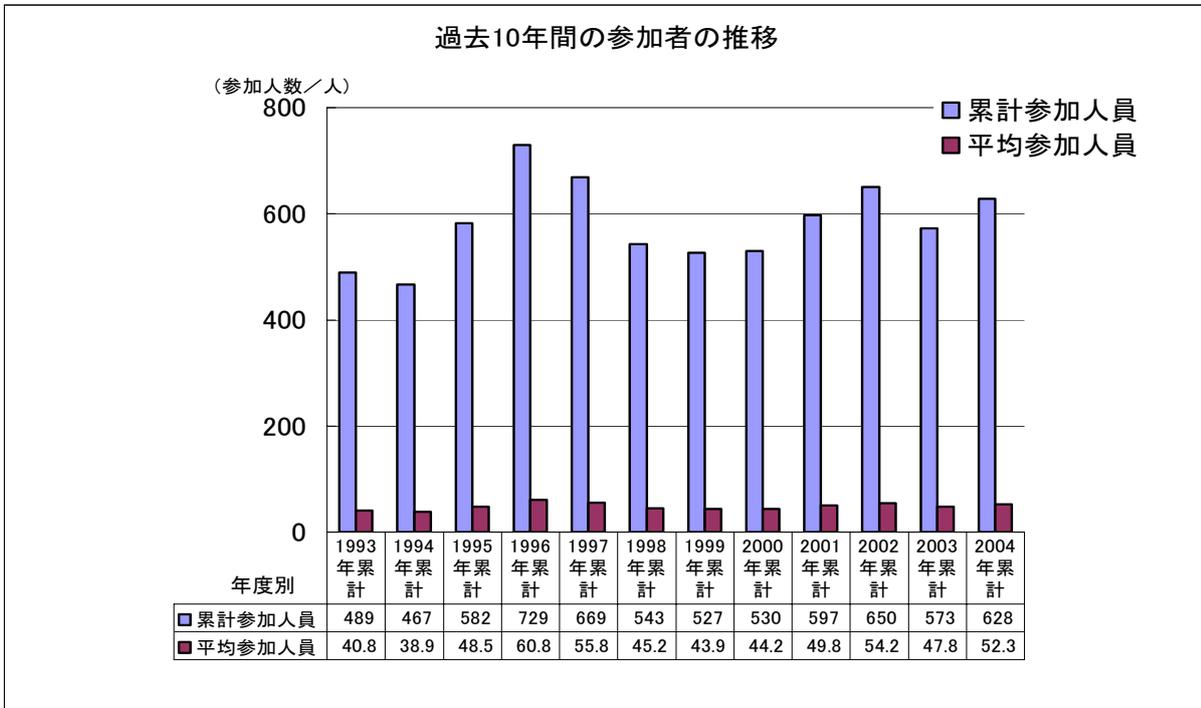
行動範囲は、広島県内を原則とするが、まれに山口県、島根、岡山の県境に行くこともある。そのほか季節の植物の開花時期を想定しながら計画を立てたりする。全般的に冬場は瀬戸内沿岸部を、夏場は県北部を中心とした方向で計画をする。また、参加者も子供連れから高齢者まで参加されるので、その辺を考慮して、毎回案内には、コースをA～Cまでランクをつけて各自自分の体力を考慮して毎回参加できるよう配慮している。

植物観察会の実施

観察会は、毎月1回観察会の日程・行き先・集合場所など及びミニレターを記載した案内を印刷発送する。毎回40名から70名前後の参加者があり、天候・場所など参加者の諸事情により人数はかなり柔軟である。一般参加者には、現地に行くのに交通手段がない方も居られるので、宮島実験所でマイクロバスの手配をし、参加人数にて実費負担でバスの申込みを事前に受付ける。決められた集合場所に自家用車で来られた方とバスが合流し現地で出発前に、実験所副所長 豊原源太郎助教授が当日

の行程や植物の概略説明をされ出発する。同行者には、広島大学理学部出身のOBがスタッフとして植物の説明をしながら付き添いで毎回1-2名参加してもらっている。

参加者には、専ら植物のみに興味ある方のみならず多種多様であるが、参加者全てに共通していることは自然に親しみ自然保護と教養を高める目的は同様である。



植物観察会実施後

観察会が終わると、翌週にはホームページを通じ会員のみならず誰でも開催地の状況が分かるようにまた、当日あったことをこと細かく情報公開している。

1. 観察会の行程での出てきた植物の種類全てのリスト(但し絶滅危惧種は除いてある)

2. 当日の目に付いた花や植物を中心に写真などを公開している。

また、時折参加者全員の集合写真を撮りその画像に当日の代表的な植物の写真を加工した集合写真を、参加者全員に発送している。(写真1, 写真2)

翌月の案内には、当月の観察会の植物の主な内容を500文字程度でヒコピアミニレターとして当日の記録を記載している。これは、当日参加できなかった方々等にその時の様子が伺えるよう記載されており、好評である。

宮島自然植物実験所では、その他ニュースレターを年2回発行しており、植物観察会の当日あった



写真1 帝釈峡にて(2004年4月18日)

事などをミニレター6ヶ月分をまとめ、宮島自然植物実験所での研究や出来事などと共に掲載され印刷したものを、観察会会員全員に毎年1回郵送している。



植物観察会 2003年1月15日
能美島 岸根にて

このようなことから、宮島自然植物実験所での植物観察会は、広島大学の学生のみならず、広く一般の方との深い交流の場としての役割を果たしている。

宮島自然植物実験所は、閉ざされた大学ではなく、広く一般の人にとってもらい野外に於ける自然教育の場として親しみを持つ身近な宮島自然植物実験施設となればと思っている。

写真 2 能美島 岸根にて (2003年1月15日)

過去参加者人数上位順

順位	開催日	地域	場所	参加人数
1	1983/7/10	佐伯郡佐伯町所山	万古溪～助藤～虫道～花上	84
2	1996/3/24	広島市佐伯区	八幡川溪谷～魚切ダム	83
3	1981/4/26	安佐北区小河内	小浜～高野	82
4	2004/4/18	神石郡神石町	帝釈峡スコラ高原	82
5	1983/4/24	広島市安芸区矢野	絵下山	80
6	1996/1/21	大竹市	阿多田島	79
7	1996/5/26	双三郡君田村	神之瀬峡	79
8	1998/4/12	甲奴郡上下町	川井	75
9	1981/11/29	広島市西区三滝町	三滝観音	74
10	1981/5/31	佐伯郡湯来町	恵下谷～大峠	73